

## [学年・学校経営等]

## 児童の承認感を高める学級集団の育成過程

小宮山めぐみ\*

## 1 はじめに

学級集団の状態が、学力や生徒指導上の様々な問題、いじめや不登校の発生率等に影響を及ぼすことが明らかになってきている。河村茂雄(2001)は、ルールとリレーションは相関関係にあり、この二つが学級の中に定着することで、子ども同士に仲間意識が生まれ、友人との交流も促進されると同時に、安心感の中で集団活動が協力的に活発になされる親和的な学級集団となるとしている。親和的な学級集団を育成していくためには、安心して生活できるための対人関係や集団生活のルールを共有させること、そして、自他を肯定的に受け止め、認め合うリレーションを形成させることが必要であることも分かっている。そこで、親和的な学級集団づくりをめざして次のように取り組んできた。学級のルールをクラスみんなで決め、定着させ、次に内在化させていくことや、学び合いの授業、問題解決のための話し合い活動などである。その際、学級集団の状態に応じて、最初はモデルを示しながら丁寧に説明し、次第に子どもたちに任せていくなど、自らのリーダーシップを変えながら取り組んできた。

これら、親和的な学級集団の確立に向けた過程において、うまく適応していく児童も出てくる一方で多くの場合、逆にその流れに乗れない児童も出てくる。例えば、学習や活動に対して意欲が低い子、友達と上手くかかわることができない子、トラブルが起きると感情をコントロールすることができず、すぐにキレてしまう子などである。このような子どもたちが抱える要因の共通点は「自尊感情の低さ」ではないかと考えた。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」(中央教育審議会, 2008)では、「自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない」ことが報告されている。「全国学力・学習状況調査」(2013)の集計結果によれば、「自分にはよいところがあると思う」の調査項目に、「当てはまる(はい)」と答えた児童の割合は34.5%しかいないことなどが報告されており、自尊感情が低いことが分かる。自尊感情は、自身の評価が主観的なものから客観的な内面認識に変化し始める年代である小学校高学年において低下する傾向がある(古荘純一, 2009)と言われている。これらの研究や報告から、自尊感情が低下し始める児童期後期からの介入が必要であることが分かる。

河村(2012)は「学級集団づくりのゼロ段階」の中で、「良好な学級集団の育成には、ルールとリレーションを同時に確立させることが必要である。」と述べている。その上で、「学級集団育成がむずかしいのは、学級集団は、時間が経てば徐々に成熟・発達していくわけではなく、退行し、崩壊に近づいていく場合もある。」とし、「学級集団は、成熟・発達と退行・崩壊の間を、ベクトルを変化させながら動いている。」ことを述べている。そこで教師は、あらゆる状態の学級集団に対応できるように「学級集団の『現在の状態』」にマッチした対応をとりながら、学級が教育的な環境になるように、集団を発達させる働きかけを絶えずしていく必要がある。」と示唆している。

以上のことから、児童の自尊感情を高めるためには、その児童だけに特別な支援をするともに、他者との関係性を育成しながら自他の承認感を高めていくことが重要である。そのために、メンバー同士のかかわり方をよりよいものにしていく理想の学級集団づくりが必要である。そして、理想の学級集団の形成を志向するには、学級集団の「現在の状態」にマッチした対応を日々継続的に行い、集団を発達させていくことが重要であると考え実践していくこととした。

特に、年度当初、生徒指導上で気になった児童4名を抽出し、この4名への直接的な個別指導ではなく、学級集団を育成していく過程で、適応していく児童の流れに、これらの児童が乗れるように配慮した指導を行うことでこの4名の承認感が上がっていくか、その効果を追っていくこととした。

K	自分に自信がなく、不安感から夜、寝られない日が度々ある。どの活動に対しても覇気がない。
M	左手の指が2本しかないため、リコーダーや裁縫などできないことがあり、自分のことを好きになれない。
S	「俺はばかだから。」が口癖で、それを理由に何もしようとしない。
H	4年生の時、教室に入れなくなり、保健室登校であった。表情がなくなり、固まることが度々ある。

\* 魚沼市立井口小学校

## 2 研究の対象と方法

- (1) 調査対象 第5学年2組, 男子12名, 女子13名, 計25名
- (2) 調査期間 平成25年4月～平成26年3月
- (3) 検証の方法
  - ・学級集団の発達過程に応じた集団育成
  - ・上学年児童用Q-Uアンケート（5月と11月）
  - ・Q-Uアンケート後の教育相談

## 3 研究の実際

- (1) 「混沌・緊張期」の学級集団 →【5年生に進級した4月】

### ① 高学年として目指す姿を熱く語る

クラス替えがあり、不安が多く、高学年として初めて挑戦することも増える。だからこそ、全員で支え合うことが大切なことを、ことあるごとに話した。その上で、学年の合言葉を教師側から提示し、教室に掲示した。この掲示物に触れながら、話し合いの機会を度々もつことで、学級全体の子どもたちの意識を方向づけていくとともに、「この先生は、1人も置いていかない。」という担任への安心感を4人へも持たせていった。

### ② 学級目標の話し合い

4月の2週目に話し合いを行った。どんなクラスにしたいか、全員から意見を聞いていった。クラスの所属感をもたせるために、同じ意見でも、必ず全員に言わせていった。全員の意見が出たところで、更に同じようなキーワードごとに、「いじめのないクラス」「日本一仲の良いクラス」「みんなが責任を果たすクラス」「助け合うクラス」「笑顔いっぱいクラス」とまとめた。その上で、25ピースの真っ白なパズルを提示し、このパズルのピースのように自分の役割をしっかりと果たしながら全部がピタッとくっついて団結していこうと話し、学級目標を「PEACE（ピース）」に決めた。キーワードを決めることも大切だと思うが、何かいつもイメージできるものがあると子どもたちは、振り返りやすいと考えた。その後、学級目標に賛成するという署名の意味も込め、全員が真っ白のパズルの1ピースを受け取り、そこに好きなデザインで色を塗り、自分の名前を書いた。こうして世界に1つだけのパズルが完成し、学級目標と一緒に一年間教室に掲示しておくで、4人にとっても常にクラスでの所属感が得られるようにしていった。

### ③ 細かいルールの徹底

休み時間に入る時は次の時間の準備をしてからにする、筆入れの中身、朝来たら提出する物や場所、返事をして立つなど、細かなルールを全員の前で、例え授業中であっても機会を逃さず徹底していった。こうすることで、4人を含めた全員が安全に安心してクラスで過ごせるように心がけた。

### ④ 授業中のペア活動

クラスの中の最小単位であるペア。このコミュニケーションの量と質を高めていくようにしていった。ただ、「ペアで話し合いなさい。」と言っても上手くかかわれないペアが必ず出てくるので、話し合う内容を伝えた後、「まず、廊下側の人から質問し始めなさい。」「傾きながら聴きなさい。」「お互い質問し合ったら座りなさい。」など、かかわりあう方法を細かく明示した。ルールを示すことで、4人もどの人とペアになってもかかわれるようになっていった。

### ⑤ 当番活動と係活動

全員が決められたことをする一人一役の当番と、自主的に数名で行う係活動を決め、役割を責任をもって行うよう働きかけた。係活動では、月ごとに反省と翌月の計画を話し合わせ、ポスターに記録させていった。記録後、「今月のMVP係」（一生懸命みんなのために活動していた係）のポスターに全員がシールを貼ることにした。こうすることで、4人も他者からの承認が得られるようにした。

### ⑥ ハートカード

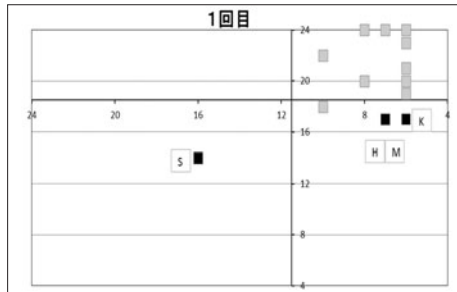
担任が見て「ありがとう」「頑張っているね」と思った児童にハートシールを渡し、一人一人持っている「ハートカード」に貼っていく活動を年間通して行った。担任が気付かない場面でのことも知りたかったので、「ありがとう」「頑張っているね」という場面を見つけたら、その友達のことを担任に報告するようにし、子どもたちも、シールを渡したい相手にいつでも渡せるシステムを作った。子どもたち同士での認め合いの場になることに加え、担任も忘れずに声を掛け褒めるようにし、4人の承認の機会を増やしていった。

### ⑦ 自主学习ノートへのコメント

毎日、全員が必ず提出する自主学习ノートを使って、担任から子どもへメッセージを送るよう心掛けていった。自主学习の内容で良かった点だけでなく、その日、見られたその子の言動へのメッセージも書き認めていった。毎日全員と言葉を交わすことは難しく、また、言葉を交わしたとしても、なかなか伝えたいことを伝えられる時間はない。そこで、

「最近、授業中の発言回数が増えていて、先生はうれしいよ。自分で良く考えて授業に参加するようになったことの表れだね。」「課外があって、いつも以上に疲れているだろうに、しっかり自学に取り組んでいて素晴らしいです。時間の使い方が上手になってきたね。」など、その子の成長してきている部分をタイムリーに褒めるようにしていった。この継続により4人の子どもたちは、「担任が常に見て認めてくれた、気付いてくれた。」という安心感の中、その日のつぶやきや相談を自学ノートに書いてくるようになり担任と子どもたちのリレーションが確立されていった。

(2) 「小集団成立期」の学級集団 →【5年生の4月中旬から5月中旬】



【図1 5月に実施したQUでのクラスのプロット図】

年度当初から、担任が気になっていた児童4名は、予想通り、学級生活満足群にはいなかった。25人中、学級生活満足群に21人(84.0%)、非承認群3人(12.0%)、学級生活不満足群1人(4.0%)という結果だった。クラス全体としては、「親和的なまとまりのある学級集団」と判定され、ほとんどの子どもたちにとって学級は安心できる居場所となっていると想定されたが、全員の承認感が高まるよう、さらに学級経営で手立てを講じていくこととした。

① 行動の価値づけ

例え、まだ成果は上がってなくても、きちんとルールに沿って努力している児童をみんなの前で賞賛する機会をもつようにした。「自分のことを見てくれている。」という安心感の他に「こういう行動に先生は大きな価値を置いているんだ。」ということが子どもたちに伝わるようにしていった。

② 生活班での明確な役割分担とローテーションによる学び合い

生活班(4人)での活動や話し合いがより活発に行われていくように、学校生活を送る上で必要な役割を与えた。①リーダー(まとめる)、②チェック(ノートや提出物の確認)、③回収(集め物や配布物を配る)、④タイム(授業開始の声掛け、話し合いのタイムチェック)の4つである。また、授業中の話し合いでは、毎時間、役割分担が変わるように「司会」「記録」「1番に発表する人」「全体発表」をローテーションしていった。こうすることで、誰がリーダーになっても支え合おうという雰囲気ができあがっていった。

③ 全員の話し合いでの目標設定

運動会や尾瀬自然教室、鼓笛課外などの学年全体で取り組んでいく活動の目標は、学年で話し合い決定した。こうすることで、目標に向かって集団の士気が高まるとともに、その目標を達成するために自分はどの行動すべきかという個の目標も明確になった。4人の児童も、一人一人が意欲的に協調的に活動できるようになっていった。

④ 最近見つけた〇〇さんの良いところ

帰りの会で、日直が「最近見つけた〇〇さんの良いところ」を発表する機会を設けた。発表後、クラスみんなで拍手をする温かい雰囲気を作り出すことに加え、その行動の意味づけ、価値づけをさらに担任が噛み砕いて話すことで、友達の良さだけでなく、自分の良さに気付くようにしていった。

(3) 「中集団成立期」の学級集団 →【5年生の9月から10月】

① 学級目標の再確認

学級目標の再確認を行い、どのようなクラスをめざすのかも一度みんなで話し合った。学級内のルールは1学期のうちに内在化・習慣化されていることや、1学期末のアンケートで全員が「このクラスが大好きだ。」と答えていたことなどを紹介し、更にクラスをより良くしていくには何が必要かという点に絞って話し合わせた。その結果、「居心地の良いクラスをつくっていくには、ルールをきちんと守っていくことに加え、相手を思いやる気持ちや、言われたことだけをするのではなく、自分たちで考えて行動することが大切だ。」と確認できた。

② 中集団で成立する自主的プロジェクト活動

言われたことは素直に、温かいかわりの中で行える子どもたちだったが、自分たちで考え、集団として実行していく力が付いていないことが1学期の課題として残った。そこで、「なかよし5GOミッション」という学年の愛称からとった活動を教師側から提案し、自分たちに必要なプロジェクトを学年で話し合っただけで決めた。その結果、1組から4人、2組からも4人の計8名という中集団からなる6つのプロジェクトチーム(挨拶、掃除、なかよし、思いやり、学習、ルール)を組織し、そのプロジェクトごと企画、運営を行っていくことになった。月末には、月の反省と翌月の作戦を立てる話し合いの時間を確保した。この時、担任は、オブザーバー的に参加し、話し合いに一定の方向づけを行った。子どもたちの話し合いは徐々に深まり、1時間の話し合いでは結論が出ないことや、活動に移すための道具の準備までは間に合わなかったが、自分たちで「昼休みに集まろう。」と声を掛けあい活動するようになった。

### ③ おはようメッセージ

2学期、行事が立て込んでくると毎日が慌ただしく過ぎた。しかし、その慌ただしい毎日の中でも、子どもたちは常に成長し、クラスみんなに紹介したい言動が数多く見られた。そこで、少しゆとりのある放課後の内に「おはようメッセージ」を毎日黒板に書くようにした。「おはよう！昨日の陸上課外の後、誰に言われたわけでもないのに、〇〇さんが、さりげなくコーンを片づけていました。ありがとうございます。きっと先生が見つけたのが〇〇さんだけで、他の種目でもそんな姿が見られているのでしょうか。」など、知らせたい良い行い、広めたい行動を書き留めておくようにした。4人の児童を含め、全員が気持ちよく1日をスタートできた。

#### (4) 「全体集団成立期」の学級集団 → 【5年生の11月から12月】

##### ① サブリーダーの役割

リーダーだけががんばればいいのではなく、フォロワーの役割や協力体制が重要だということが、この頃分かってきた。しかし、毎回同じようなメンバーがリーダーをし、その居心地の良さに慣れてきてしまっていた。そこで、リーダーとして活躍しているような子、特に、クラスのメンバーに影響力の強い児童へ頻りに声掛けしていった。担任としての思いを素直にその子に伝え、「普段なかなか前に出てこない〇〇さんをリーダーとして今回活躍させたい。そのためには、あなたの協力が不可欠である。」といった内容を伝えた。この影響力が大きい児童は、4人を含めたクラス全員の「自尊感情を高めるために重要な他者」であることが多く、この児童がサブリーダーになり、リーダーの提案を積極的に受け入れ、メンバーに活動を促すことで、集団として成立させていくことができ、4人の誰かがリーダーになった時もフォロワーとして支えてくれた。

##### ② 行事の振り返り

学級や学年全体で取り組んだ活動への振り返りを必ず行った。個人の振り返りだけでなく、学級や学年全体としての振り返りも行うようにし、個人だけでは味わえない「協力できたことの喜び」や「支え合えたことのうれしさ」を共有していった。そして、集団として高まることができたことを認め、評価していくことで、次の活動の意欲付けにした。

#### (5) 「自治的集団成立期」の学級集団 → 【5年生の1月から3月】

##### ① 6年生ありがとうの会

子どもたちの間にはルールが内在化し、感情の交流も深まってきた。この時期に、5年生の一大イベントである「6年生ありがとうの会」を行う意味や1年間の総まとめを行動で表そうという意欲付けを担当が話した。そこからのスローガン決めや役割分担は手際よく自分たちで行うことができた。「6年生ありがとうの会」当日も、ステージ上で大きな声で説明をするのに緊張している児童へ近づき、「大丈夫？」と声をかけると「ステージに上がるのは一人だけど、5年生のみんなが支えてくれるから、みんなを信じて頑張れます。」と笑顔で答えてくれた。この児童の言う通り、「会を絶対に成功させたい。」という思いを全員が強く持っており、自分の出番以外にも、友達を支えようと必死に盛り上げる姿や下学年へ補助説明をしている5年生の姿に成長を感じた。

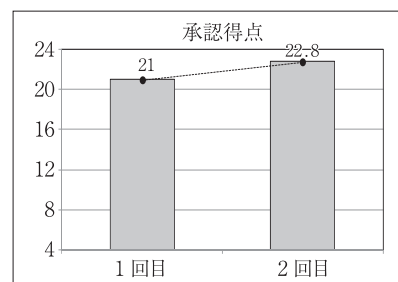
##### ② サンキューカード

「ハートカード」でお互いにハートシールをやりとりし、温かい雰囲気の中、ハートシールは相当の枚数にのぼった。しかし、学期末に振り返った時には、枚数の多さは嬉しいものの、誰からどんな内容でもらったシールなのか分からないため、今一步、4人の自尊感情が高まらないと判断した。そこで3学期は、毎日、帰りの会の時に一人1枚「サンキューカード」か「グロウアップカード」を書くこととした。最初の頃は「消しゴムを拾ってくれてありがとう。」「クーピーを貸してくれてありがとう。」といったその場限りのもので、心の交流というところまでは至らなかった。しかし、時間とともに、「プロジェクトの仕事、一人で大変だったとき、手伝ってくれてありがとう。助かったよ。」「委員会の時間に発言してくれてありがとう。意見が出るとすごく助かるよ。」など、心の交流が文面から見られるようになっていった。その後、「何があっても笑顔ですごいね。私も〇〇みたいに、常に笑顔で頑張るね。」「分からない問題があっても、あきらめないで分かろうとする努力をされていてすごいね。〇〇のいいところだと思うよ。ほくも真似したいよ。」など、直接かかわってなくても、見つけた友達のよさまで書くようになった。

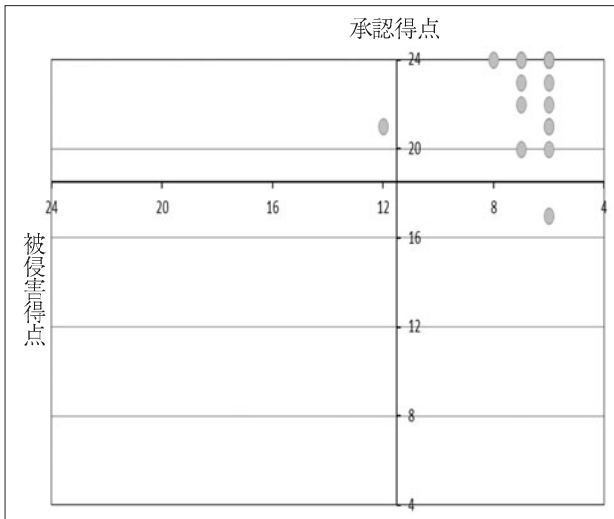
## 4 結果と考察

【図2】は、5年生の5月（1回目）と、5年生の11月（2回目）のQU調査における「承認得点」のクラス平均の変化を示したものである。学級生活意欲尺度における承認得点が21点から22.8点に増加した。

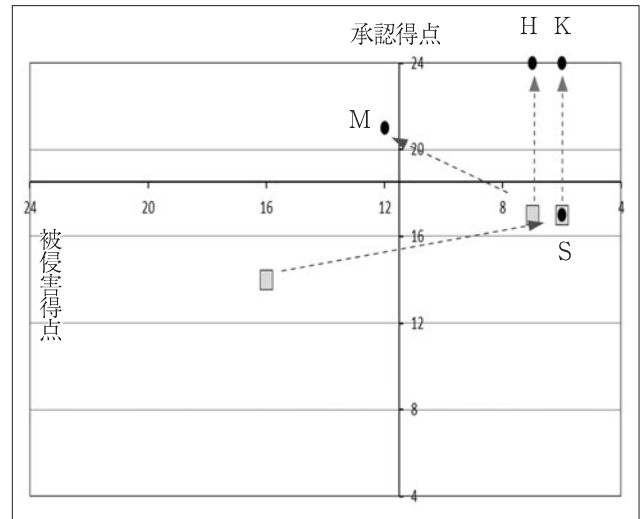
【図3】は、2回目のQU調査（11月）のクラス全体のプロット図である。QU調査における学級生活満足群が、5月は84.0%だったが、11月は91.7%に上昇した。これは、学級集団の「現在の状態」にマッチした対応を日々継続的に行う



【図2】 クラス全体の承認得点の変化



【図3 11月に実施したQUでのクラスのプロット図】



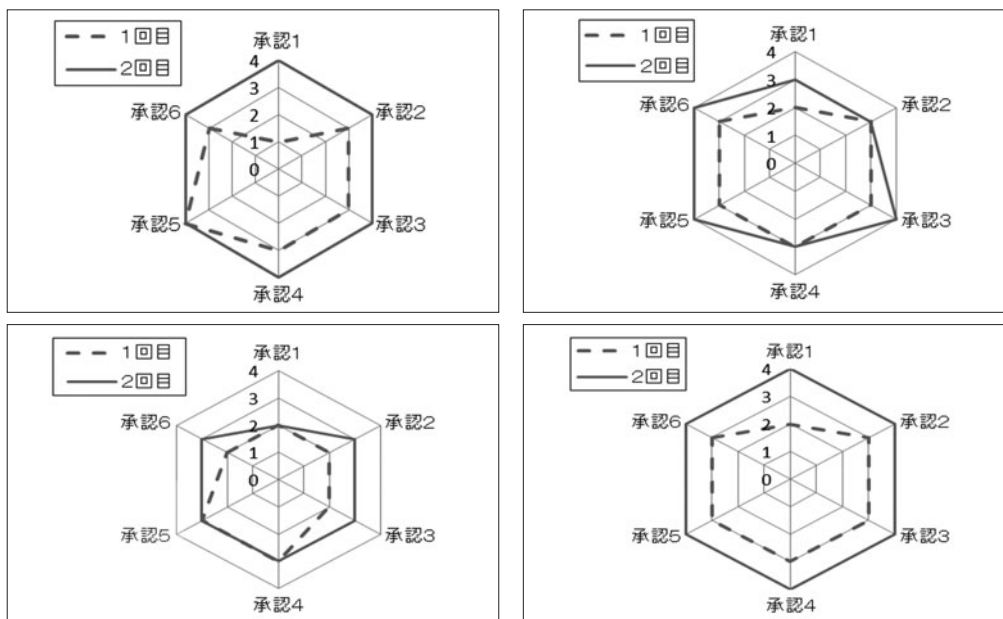
【図4 抽出児童4名のプロット図の変化】

ことで、ルールとリレーションを同時に確立させたことによって承認得点が増加し、被侵害得点が減少したことによる。「ルール」の確立では、最初は教師がモデルを示しながら丁寧に説明し、徐々に児童が学級集団のルール作成に主体的に関わるようにしたことによって、学級集団に所属している全員が気持ちよく安心して過ごせる環境をつくることができた。これらを基盤として、主に「ハートカード」や「サンキューカード」の取組で「リレーション」を確立し、他者に認められる体験を多くすることによって、承認感を向上させることができたと考えられる。

【図4】は、抽出児童4人が、1回目と2回目のQU調査でどのように変化したかを示した図である。総合得点は、4人とも増加した。【図5】は、1回目と2回目のQU調査での承認得点にかかわる6つの質問項目における素点を表したものである。【表1】は、抽出児童4人に対する教育相談の結果をまとめたものである。当初持っていた承認感の低さは、他者から認められる体験を通して、少しずつ変化したものと推測される。

	質問項目
承認1	あなたは、運動や勉強、係活動や委員会、しゅみなどでクラスの人から認められる（すごいと思われる）ことがありますか。
承認2	あなたが失敗したときに、クラスの人からはげましてくれることがありますか。
承認3	クラスの中に、あなたの気持ちを分かってくれる人がいると思いますか。
承認4	あなたが何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたり、おうえんしてくれたりすると思いますか。
承認5	あなたのクラスには、いろいろな活動に取り組もうとする人がたくさんいると思いますか。
承認6	あなたが自分の思ったことや考えたことを発表したとき、クラスの人たちはひやかしたりしないで、しっかりと聞いてくれると思いますか。

《1・・・全くそう思わない、2・・・あまりそう思わない、3・・・少しそう思う、4・・・とてもそう思う》



【図5 抽出児童4名の承認感に関する質問項目への回答の変化】

4人とも共通して得点が増加している質問項目は、承認3と承認6である。承認3と承認6の得点が増加したのは、友達が話を聴いてくれるようになったと感じていることによることが面談から明らかになった。このことに特に有効であった取組は、明確な役割分担とローテーションによる学び合いである。生活の最も大きい割合を占める授業の時間に、小グループによる意見交流を頻繁に行い、その際、友達の意見をしっかりと聞くことを意識させていくことで、聞き合う雰囲気が増え、所属感や相互の関係性の高まり、他者理解や自己評価の向上につながっていったと考えられる。

【表1 QUアンケート後の教育相談】

	1回目のQU調査での承認質問に関する回答や調査後の担任との面談での発言から分かること	2回目のQU調査での承認質問に関する回答や調査後の担任との面談での発言から分かること
K	<ul style="list-style-type: none"> <li>承認1が特に低く、承認5が高かったことから、クラスのみならず自分は認められていないが、クラスのみならずすごいな、自分もその仲間入りをしたいなという願望が強いと推測した。</li> <li>担任との面談では、すっかり自分に自信をなくしており、「どうしても忘れ物をしてしまうし、何をやっても上手くいかない」「不安で眠れない」と悩みを打ち明けてきた。そこで、ただ不安に思っているだけでは解決につながらないので、具体的にどうしていくか具体的な策をいくつか提案した。また、人にはそれぞれ得意不得意があるのだから、自分の長所に向けていくよう働きかけた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>承認得点が全て上がった。</li> <li>担任との面談では、「自分が何気なくやったことでも、『ありがとう。』と言ってくれる友達が多くて嬉しくなった。」と言っており、サンキューカードにより、自分も学級の役に立っていることに気付いたことで承認得点が上がったと思われる。また、「授業中、班で話し合いをすると、一人で考えていたり、ペアで話し合いをするよりたくさんのお考えが出てきて楽しし、問題を解けた時の喜びが倍増する。」と言っていた。授業中のペア活動での他者とのコミュニケーションが増加し相互の関係性が高まった結果、承認3や承認6の項目での承認感が上がったものと考えられる。</li> </ul>
M	<ul style="list-style-type: none"> <li>承認1が特に低く、クラスのみならず認められていないと強く思っていることが分かった。</li> <li>担任との面談では、「一人でいても全然大丈夫。3年生の頃から一人が多かったし、もう、慣れました。」と言っていた。そこで、それでは寂しすぎるし、友達とかかわると、今よりもっともっと学校生活が楽しくなるよと伝え、休み時間、教室に残っている児童の輪にまず担任が入り、その輪の中にMも自然に入れるようにしていった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自学ノートや雑談の中で、担任とのリレーションをまず深め、さらに友達とつないでいったことで、承認1、3、5、6が上がった。</li> <li>担任との面談では、「分からない問題があったり、できないことがあったりした時、前は黙っていたけど、『分からない、教えて。』と言うと、近くの席の友達がすぐ助けてくれるようになったから、安心して授業ができるし、学校が前より楽しくなった。」と言っていた。</li> <li>ただ、「放課後、家に帰ってから遊ぶ友達がいない。」「グループを作る時には、まだ自分から入っていけない。」と話しており、それが非侵害得点となって表れた。</li> </ul>
S	<ul style="list-style-type: none"> <li>承認得点1、2、3、6が特に低かった。「どうせ、俺はばかだから。」が口癖で何もやろうとしないことに加え、周りの児童に対しても興味を持たない児童であった。</li> <li>担任との面談では、「頭も悪いし、運動もできないし、どうせ俺には、良いところなんてない。」と言っていた。しかし、授業中、的を得たよいつぶやきをたくさんする児童だったので、そのつぶやきを拾いクラスへ広めていくことにより、他の児童から関心を向けられ認められるよう心がけていった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任との面談では、「前は自分のことが好きな確率が0%だったけど、今は、30%くらいになった。」と言ってきた。それはなぜか聞くと、「授業中に同じ班のメンバーが自分の意見を『すごい!』と言って聞いてくれる。サンキューカードもたくさんもらえるようになって、友達があたたかい言葉をかけてくれて、助けてくれることがいっぱいあることが分かったから。」と話してくれた。自分に自信がない子にとって、サンキューカードは何度も読み返せるので、自信につながっていくと言える。</li> </ul>
H	<ul style="list-style-type: none"> <li>能力的には高いものを持っている児童だが、ずっと教室に入れずにいたことで、ますます自信をなくし、承認得点が全体的に低かった。</li> <li>担任との面談では、「4月、5月は、みんなとどう接すればいいかわからなくなって、逃げ出したいことが何度かあった。かわるのが怖かった。」と胸の内を話してくれた。「先生はずっと応援しているよ。何でも力になるよ。」と伝え、自学ノートを通じて、翌日の事など、些細な心配事をたくさん尋ねてきたり、アドバイスを要求してきたりするようになった。自信がない様子がよく分かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任との面談では、「先生が話しやすかったから、何でも相談できたし、班で話し合う時、リーダーを任されて、みんなが自分を頼ってくれるから、頑張ろうと思ったし、うれしかった。そうしたら、学校がすごく楽しくなった。」と言っていた。</li> <li>小さなことから、リーダーを任せていき徐々に自信をつけていったことや、サブリーダーとして学級のリーダー的存在の児童をフォローさせ、Hのことをすごく気にかけていることを伝えたことで「一人でできないことも〇〇さんと一緒ならできた。」と自信につながっていった。</li> </ul>

親和的な学級集団を育成するためには、教師が日々の観察や面談、QUなどを効果的に活用し、「個人」「学級集団」「学級集団と個人との関係」を把握する必要がある。これらを定期的の実施し、前回の結果と比較することで刻々と変化する学級集団の実態にマッチした手立てを工夫して、日常的に継続して取り組んでいく必要がある。このような取組についてくることができない児童は、個別の支援だけではなかなか改善しないことが多い。そこで、これらの子どもの承認感を高めることを意図した学級集団づくりを統合的に行うことが「現在の状態」にマッチした取組となる。

#### 【参考文献】

- 小学校学習指導要領 2008年、全国学力・学習状況調査 2013年  
 古荘純一 「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」(光文社新書) 2009年  
 真集城和美 「自己評価に関する発達心理学研究」(風間書房) 2005年  
 河村茂雄 「学級集団づくりのゼロ段階」(図書文化) 2012年  
 河村茂雄 「学級リーダー育成のゼロ段階」(図書文化) 2014年  
 河村茂雄 「日本の学級集団と学級経営」(図書文化) 2010年  
 水野治久 品田笑子 伊佐貢一 深沢和彦 「集団発達を促す学級経営」(図書文化) 2012